

さいたま市立浦和博物館館報

あかんさす

VOL. 39-1

通号 第 100 号

ACANTHUS : BULLETIN OF SAITAMA MUNICIPAL URAWA MUSEUM

「浦和博物館収蔵品展」を開催しました

当館では、市民の皆様から寄贈された貴重な資料を数多く収蔵しており、特別展、企画展など様々な事業の中で活用していますが、資料の種類や性格が多岐にわたるため、活用のお機には限りがあります。

こうした資料を活用し、新たな切り口から郷土の歴史や文化を紹介するための試みとして、平成22年(2010)9月4日(土)から10月3日(日)まで、「浦和博物館収蔵品展」を開催しました。

おもな展示資料

●入館券コレクション

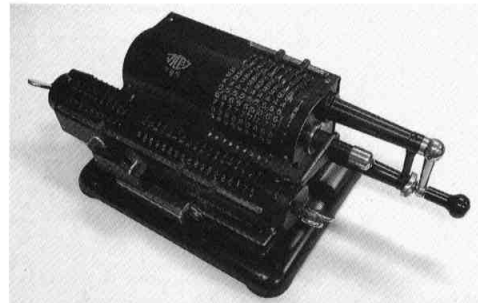
当館に寄贈された、博物館や美術館の入館券、社寺などの拝観券、商業施設で開催された展覧会の入場券などのコレクションから、市内の施設の入館券や、市内の会場で開催された展覧会の入場券、現在では訪れることのできない施設の入館券や入場券などを展示しました。

●計算機・計算尺

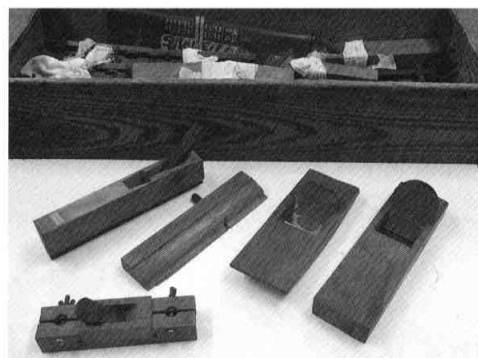
電子計算機が普及するまで、設計や構造計算、統計などの複雑な計算には、機械式の計算機や計算尺といった道具が使われていました。当館所蔵の計算機などを展示しました。

●宮大工の道具

市内には、普通の建物のほか、社寺の建築を手がけられる宮大工の方々も活躍していました。当館に寄贈された、建築や内外装の各部に対応した多種多様な道具や、建築関係の資料、書籍などを展示しました。



マルゼン計算機（昭和20年代）



様々な形のかんな

■ 目 次 ■

「浦和博物館収蔵品展」を開催しました	1
特別展「見沼のうつりかわり」を開催して	2
「あかんさす」第100号を迎えて	4



特別展「見沼のうつりかわり」を開催して

平成22年(2010)10月9日(土)から12月12日(日)まで、当館にて特別展「見沼のうつりかわり」を開催しました。

さいたま市の中央に位置する「見沼」は、貴重な緑地空間として、また市のシンボルとして市民の皆様にも親しまれています。この見沼の歴史を振り返ると、それぞれの時代の自然の条件や社会の要請に沿って、その姿を変えてきたことがわかります。今回の展示では、見沼の役割や風景の変化に注目し、さいたま市に人類が登場する旧石器時代から現在に至るまで、見沼と人々との関係がどのように変わってきたのかを、大きく4つのテーマに区切ってご紹介しました。

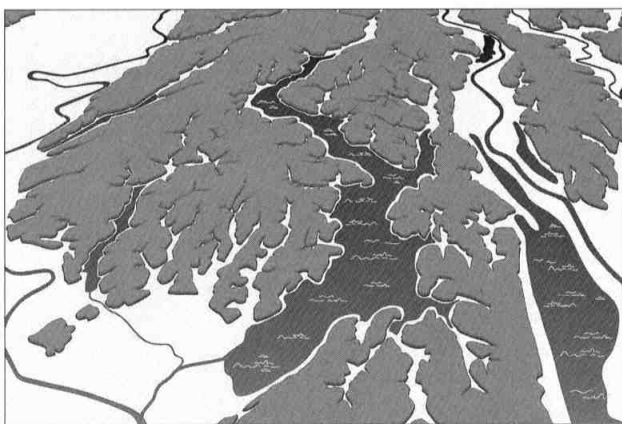
また、11月28日(日)には、東洋大学国際地域学部教授の松浦茂樹先生をお招きし、浦和駅東口駅前「コムナーレ」にて、関連講座「見沼の開発史」を開催しました。(この模様については次号でお伝えいたします)

展示の概要

1. 見沼の誕生

最終氷期にあたる後期旧石器時代(約2万年前)に侵食によって生まれた大きな谷が、縄文時代の温暖化による海進によって土砂で埋まり、現在の低地や見沼となったようすを紹介しました。

見沼が干上がってしまうことなく沼として残ったのは、見沼の出口にあたる場所を流れていた大河川(旧入間川等と呼ばれる)に沿った自然堤防の発達が発達が主因と考えられますが、これまでの展示ではそうした観点はあまり盛り込まれていなかったため、今回一つのコーナーを設けて取り上げました。



弥生時代から中世にかけての見沼周辺(推定)
図の左端を流れる大きな川(旧入間川)に沿って自然堤防が発達し、これがダムとなって見沼が生まれたと考えられます。

2. 「見沼溜井」をつくる

寛永6年(1629)に行われた、農業用水の水源池とするために、見沼の幅が狭くなる場所に「八丁堤」を築いて見沼を溜池とした工事の概要や、それによって周辺の地域で生じた耕地の水没被害などについて紹介しました。現在の見沼代用水の八丁堤より下流の部分は、この工事が行われると同時期につくられた用水路であり、見沼溜井の水を現在のさいたま市南部や川口市・草加市・東京都足立区などの地域まで運んでいたことなども紹介しました。



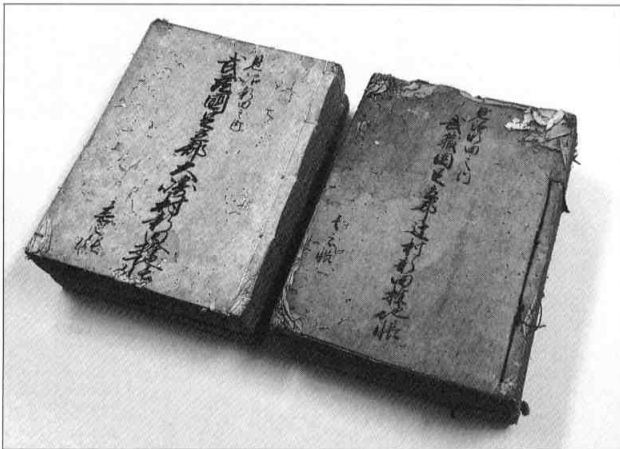
「見沼水流反歩改帳」(部分) 宝永5年(1708)

さいたま市立博物館蔵
当時の中丸村(現見沼区)で、見沼溜井の造成により水につかるなどの被害を受けた土地を調べて書き上げた書類です。



3. みんなで作った「見沼たんぼ」

享保12年（1727）9月から翌年3月にかけて行われた、見沼代用水の開削と見沼溜井の干拓工事について、工事に至る経緯と、工事に参加した村々の様子を中心に紹介しました。見沼溜井の水を利用する村々が反対する中、幕府の主導の下に行われた工事ですが、計画の立案にあたっては村々からの提案があったこと、新田開発を見沼周辺の村々に割り当てるにあたっては、全ての村ではなく希望する村に割り当てるなど、周辺の村々の意向もある程度取り入れられたことがうかがえます。

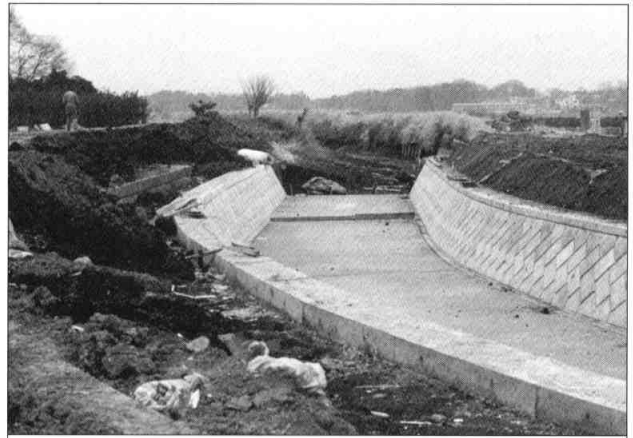


「見沼新田之内 武蔵国足立郡辻村新田検地帳」
「見沼新田之内 武蔵国足立郡大崎村新田検地帳」
享保16年（1731）
新田の造成から3年の年貢免除の期間を終えた享保16年に、新田の検地が各地で行われました。これにより土地の面積や耕作者が確定し、年貢が課せられるようになりました。

4. 見沼の現在と未来

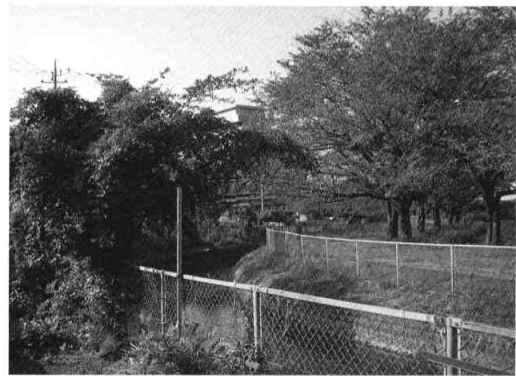
昭和30年代以降、見沼たんぼでも都市化が進み始めますが、昭和33年（1958）の狩野川台風以降、遊水地としての機能が評価されることで緑地として維持されてきたこと、それに伴う土地所有者の負担や、社会情勢の変化による緑地としての再評価などについて紹介しました。

昭和40年代～50年代にかけての見沼の風景写真を、地元の方から寄贈していただいたため、この時期の見沼の変化を知ることができる写真を多く展示することができました。芝川の拡幅工事、米の生産調整などによる水田から畑への転換、斜面林の開発、見沼代用水のコンクリート舗装など、現在見られる見沼の風景はこの時期に形作られたものが多くあります。



見沼代用水のコンクリート舗装工事

昭和55年（1980）頃 緑区馬場土でできた水路は崩れやすく、地中に水が漏れ出してしまふことも多いため、底と両岸を舗装する工事が昭和53年（1978）から進められました。これにより水路の管理は容易になりましたが、見沼の風景や水辺の生物の生息環境に大きな影響を与え、自然保護運動が盛んになるきっかけとなったともいわれています。



現在の様子



拡幅工事の進む芝川

昭和50年代後半（1980年代前半） 緑区新宿洪水防止のための芝川の拡幅工事は、見沼付近では昭和51年（1976）からはじまりました。今では、それ以前からの橋はほとんどが架け替えられています。



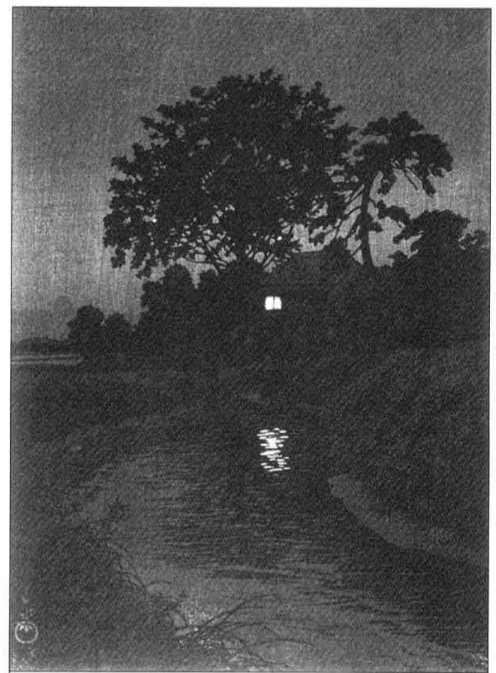
このほかの展示

以上の4つのコーナーのほか、「氷川女體神社と見沼」、「見沼の伝説」、「見沼の蛍」など、見沼をめぐる文化についても、それぞれコーナーを設けて解説しました。

氷川女體神社については、中世から「御室女躰宮」などと呼ばれ信仰を集めていたことや、神輿を船に乗せて見沼へ漕ぎ出して祭礼を行っており、その際に見沼に立てた四本竹の根元が発掘調査によって大量に見つかったことなどを紹介しました。

こうした信仰の対象となっていた見沼は、幕府による干拓事業によって姿を消し、その後は数々の伝説として語り継がれるようになります。周辺の人々が見沼をどのように語り継いできたのかを、浦和市史・大宮市史に採録された伝説などで紹介しました。

展示期間中にも、博物館近隣の斜面林で大規模な宅地造成が始まるなど、見沼の姿は今も変わり続けています。見沼の未来に関心を持ち、それぞれの立場からできることを考える、今回の展示がその手助けとなれば幸いです。



川瀬巴水画「大宮見沼川」(版画)
昭和5年(1930)さいたま市立博物館蔵
当時の大宮付近の見沼代用水西縁は蛍狩りの名所でした。昭和7年(1932)には国の天然記念物にも指定されています。(昭和30年(1955)指定解除)

「あかんさす」 第100号を迎えて

「浦和市郷土博物館館報」として昭和48年(1973年)2月10日に創刊して以来38年、ここに第100号の発行を迎えることができました。市民の皆様、ご関係の皆様、長年にわたる博物館活動へのご支援、ご協力の賜物であり、職員一同心より御礼申し上げます。

創刊当初に掲げた「博物館自体による博物館活動の紹介」という館報の目的は、現在ますますその重要性が高まっています。新聞、テレビ、情報誌など様々なメディアへの情報提供、博物館ウェブサイトの開設など、博物館の情報をお伝えする手段は増えてきましたが、紙の印刷物という馴染み深い方法もまだまだ重要です。今後とも、皆様に当館の魅力や情報をお伝えできるよう、紙面の充実に努めてまいります。ご指導、ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

この館報は2000部作成し、1部当たりの印刷経費は25円です。

●名前の由来・「あかんさす」って？

「アカンサス」は、ヨーロッパ南部からアフリカ、南アジアに自生している草です。古代ギリシャの様式を取り入れた建物には、アカンサスの葉の形をした飾りを柱の上などに取り付けることが多く、日本でも明治時代の洋風建築にこの様式が取り入れられました。当館建物の前身である埼玉県師範学校「鳳翔閣」にもこの飾りがあり、当館のシンボルとなっています。



さいたま市立浦和博物館館報 **あかんさす** No.100
編集・発行 さいたま市立浦和博物館
〒336-0911 さいたま市緑区三室2458番地
TEL・FAX 048-874-3960
発行日 平成23年2月18日
ホームページ
<http://www.city.saitama.jp/hakubutsukan.html>
E-mail urawa-museum@city.saitama.lg.jp

